

令和3年度全国高等学校総合体育大会 「審判員報告」

C2 女子審判長

黒須 真希

1. 採点上打ち合わせた事項

(監督会議での報告事項も含む)

①適用規則の確認

採点規則 2017 年版変更規則 I、女子体操競技情報 30 号及び高体連制定の高校適用規則を適用する。

②採点指針の確認

今年度の採点指針としてあげている「膝、つま先の緩みのない美しい姿勢での正確な技の実施」「高い D スコアの獲得を目指した演技構成」をすべての種目において採点上の重要項目とする。ただし、「膝、つま先の緩みのない美しい姿勢での正確な技の実施」について満たせていない実施に対しては厳密に減点をする。

③D スコアへの質問に対して

D1 審判へ口頭で質問をし、意見の相違がある場合はその班の競技が終わるまでに書面で審判長まで提出をすること。最終演技者については、得点表示後、速やかに対応する。検証用のビデオがないことの確認。

④練習時間について

【予選】 1 組最大 6 名 (チーム 4 名 + 個人 2 名)

VT : 1 人 2 本

UB : チーム 3 分 20 秒、その後 個人 2 名 各 50 秒

BB : チーム 2 分、その後 個人 2 名 各 30 秒

FX : 3 分

【決勝】 1 組最大 4 名

VT : 1 人 2 本

UB : チーム 3 分 20 秒 : 個人 各 50 秒

BB : チーム 2 分 : 個人 各秒 30 秒

FX : チーム・個人ともに 一組に 2 分 30 秒

* チーム内に棄権者が出て人数が少なくなっても、チームに同様の時間が与えられる。

⑤情報 30 号の内容の確認

- ・「不適切なマグネシウムの使用、器械を損傷させる」ことについて

跳馬の助走路にマグネシウムで印を付ける行為は減点の対象となるため、助走路に印を付けたい場合はテーピングを貼り、終わったら剥がすこと。

平均台上への水の使用禁止

- ・出血があった場合の対応について

出血があった場合には、速やかに止血をする等の対応をし、競技の進行に関わる場合は D1 審判へ申し出ること。器具やマットへ血液が付着した場合には競技スタッフに処置をお願いすること。また、もともと傷があるような場合には出血がないように事前にテーピングを巻くなどの対応の確認。

⑥演技中のコーチの行動について

採点規則にはコーチの行動の違反項目として「合図、かけ声、応援等でコーチが自分の選手を援助する」という減点項目がある。演技中に選手への指示や応援と見られるかけ声、拍手などは控えていただくよう監督へ促した。

2. 採点上起こった事項とその処理

①得点入力システムのエラー

予選第1班の競技から、得点の入力システムに不具合が出たため、すべての種目の得点入力、選手名の表示、得点の表示ができなくなってしまった。原因がわからないということであったため、予選第3班から6班まですべての種目で審判員がジャッジペーパーに得点を記載、セクレタリーが集計をして得点用紙に記入をして対応した。選手名の表示、得点表示ができなかったため、D2審判がDスコアを表示し、ゼッケン番号、合計得点、その他の減点を掲示することで対応した。予選1日目はこれによって1時間遅れることとなった。予選2日目はすべての種目で審判員がジャッジペーパーに得点を記載、セクレタリーが得点を入力することで対応し、時間通り終えることができた。

②Dスコアへの質問

全競技を通して、段違い平行棒で1件、平均台で3件、ゆかで1件、Dスコアに対する質問があった。審判長への書面での質問はなかった。

3. その他特記事項・意見・感想等

今大会では予選1班の競技から、得点入力システムに不具合が出た関係で各班の演技開始が大幅に遅れてしまい、さらに得点表示や演技の開始のモニター表示ができず口頭や掲示での対応となったため、選手、監督の皆様にはご不便をおかけしてしまいました。近年、全国高校総体では開催県のご配慮により得点入力システムが導入され、そのお陰で採点業務もスムーズに進めることができ、大変助かっております。しかし、稀に機器の不具合などが起きることもあるため、それを想定した対応を考えておかなければならないと思います。前回大会でも機器のトラブルがあったため、今回は事前に万が一システムが動かなくなってしまった時の対応策を確認していたため、紙ベースでの対応への切り替えはすぐにはできたのですが、集計などもすべて手作業となったため競技が大幅に遅れてしまい、サブ会場で練習を終えてから選手を長く待たせてしまうことになり本当に申し訳なかったです。予選1日目の1班から不具合が出て、ほぼ予定していたように機器を使うことができない結果となってしまったことを、来年度の開催に向けて課題としてもらいたいと思います。

選手の演技について1番感じたことは、姿勢の悪い選手が多かったことです。会場練習を含め、予選決勝と選手の演技を見ましたが、膝やつま先を伸ばせない、また伸ばす意識をしていないように見える選手が多くいました。D難度やE難度の技を演技構成の中に入れてられるようなレベルの選手であっても、膝やつま先を伸ばせないということは練習で姿勢の意識ができていないのではないかと感じました。次にダンス系の技について、1つの技で減点が0.50以上ある技を演技の中に入れていた選手が多くいることが気になりました。ダンス系の技は「姿勢 0.10/0.30/0.50」「高さ 0.10/0.30」「正確さ 0.10」その他技の終了時の状態によって減点が生じます。理想の形から大きくはずれるような場合は1つの技で1.00近く減点され

ることでもあります。C 難度や D 難度、E 難度のダンス系の技を多く入れて D スコアを高くしていくことは狙ってほしいところですが、1つ1つの技でどれだけ減点があるのかということはしっかり考えて構成してほしいと思います。また、選手自身がその技の理想の形をイメージできているかということも大事なことだと思いますので、演技の中に入れている技の理想の形をしっかりイメージして練習してほしいです。

今後も、採点指針として掲げている「膝、つま先の緩みのない美しい姿勢での正確な技の実施」を最重要項目として採点をしていこうと思いますので、選手、コーチの皆さまも美しい姿勢での技の実施をポイントとして、その上で D スコア向上を目指し、高いスコアを獲得できる演技を目指してほしいと思います。

C 2 跳馬

D 1 審判員 尾西 奈美

1. 採点上打ち合わせた事項

① 採点指針の確認（情報 30 号）

- ・ D スコアの高い跳躍技の実施
- ・ 高さや距離を伴うスピード感のあるダイナミックな跳躍

② E 審判団の確認事項

- ・ 採点指針をもとに各審判員は各跳躍の理想像を持って採点する
- ・ 技の質を見極め、難易度から受ける迫力や雄大性を加味し採点する
- ・ 採点指針に沿わない実施の場合は採点規則の減点項目のいずれかから減点する
- ・ D スコアの高い跳躍技の実施を理想としているが、著しい技術不良や未完成な実施に対しては厳密に減点をする

③ D 審判団の確認事項

- ・ 技の承認についての確認
(ひねりを伴わない後方伸身宙返り・前方屈身宙返り・G3の跳躍技での着手の向き)
- ・ 無効となる跳躍・支持が片手のみの跳躍の確認
- ・ 表示された跳躍技と異なった場合についての確認
(E 審判団に承認した跳躍技を知らせる)

④ 適用規則（変更規則）の確認

- ・ 助走についての確認
(跳躍板や器械に触れていない場合は3回目の助走が認められる)
- ・ 跳馬の種目特有な実施減点の確認

支持局面	支持が長い	-0.10/-0.30/-0.50
第2空中局面	ダイナミックさに欠ける	-0.10/-0.30/-0.50

*ダイナミックさに欠ける跳躍については、跳躍の大きさから感じられる迫力だけではなく技の難易度から受ける迫力や雄大性なども加味し、第10章跳馬「種目特有な実施減点」

の「ダイナミックさに欠ける-0.10/-0.30/-0.50」の減点項目に則り明確に差をつける。

⑤アシスタント（線審）の確認

- ・練習回数のカウントに関する確認
- ・ライン減点の確認

2. 採点上起こった事項とその処理

・予選1日目にて、得点入力・表示システムが作動しなかったため、E審判はタブレットを使用せず、採点用紙で対応しました。得点は口頭で伝え、その後手動の得点版で表示しました。予選2日目と決勝もE審判は採点用紙にて得点記入、得点を口頭で伝え、セクレタリーが入力し、システム上にて掲示されるという流れで進行しました。

・1本目の跳躍技の採点をしている時に、2本目の跳躍を実施した選手がいました。審判長に報告し、採点規則8章・合図がないのに演技を開始する(0)を適応しました。

3. その他特記事項・意見・感想

今大会に出場した選手の跳躍技は、前転とび(Dスコア2.00)から伸身ツカハラとび2回ひねり(Dスコア5.60)と技の難易度の差は大きく、大変幅広い選手層でした。

予選に出場した選手の中で最も多く実施された跳躍技は屈身ツカハラとびで、出場選手266名中80名、約30%の選手が実施していました。Dスコア4.60以上を実施した選手は65名、約24%でDスコアの高い跳躍技を実施する選手が増えた印象を受けました。

しかし、全体を通してDスコアは上がってきているものの姿勢欠点があり、着地姿勢までコントロールできていない完成度の低い跳躍も見受けられました。

<予選出場選手266名の最も多く実施された技と、Dスコアの高い跳躍技>

跳躍番号	跳躍技	Dスコア	跳躍人数(%)
3.20	屈身ツカハラとび	3.70	80名(約30%)
3.32	伸身ツカハラとび1回ひねり	4.80	24名(約9%)
3.33	伸身ツカハラとび1 1/2ひねり	5.20	4名(約2%)
2.21	前転とび～前方屈身宙返り～1/2ひねり	4.60	4名(約2%)
4.32	ロンダート後転とび～後方伸身宙返り1回ひねり	4.60	24名(約9%)
4.33	ロンダート後転とび～後方伸身宙返り1 1/2ひねり	5.00	4名(約2%)
4.34	ロンダート後転とび～後方伸身宙返り2回ひねり	5.40	4名(約2%)

決勝においては、出場した選手84名中、第二空中局面で後方伸身宙返り1回ひねり以上のひねりを伴う跳躍技を実施したのは54名、64%で一昨年の57.3%を上回りました。

第二空中局面で伸身宙返り1 1/2ひねり以上のひねりを伴う跳躍技を実施したのは11名、13%、伸身ツカハラとび1回ひねりとロンダート後転とび～後方伸身宙返り1回ひねりを実

施した選手が 43 名、51%で昨年の 42.6%を大きく上回りました。

決勝に出場した半数以上の選手が D スコア 4.60 以上の跳躍技に積極的に取り組んでいることがわかり、大変前向きな取り組みと準備をしてきたことが考察できました。

<決勝出場選手 84 名の最も多く実施された技と D スコアの高い跳躍技>

跳躍番号	跳躍技	D スコア	跳躍人数(%)
3.32	伸身ツカハラとび 1 回ひねり	4.80	22 名(約 26%)
3.33	伸身ツカハラとび 1 1/2 回ひねり	5.20	3 名(約 4%)
3.34	伸身ツカハラとび 2 回ひねり	5.60	1 名(約 1%)
4.32	ロンダート後転とび～後方伸身宙返り 1 回ひねり	4.60	21 名(約 25%)
4.33	ロンダート後転とび～後方伸身宙返り 1 1/2 回ひねり	5.00	3 名(約 4%)
4.34	ロンダート後転とび～後方伸身宙返り 2 回ひねり	5.40	4 名(約 5%)

D スコア 4.60 以上の跳躍技を実施した選手においては、支持局面で規定されたひねりの時期が早すぎる、腕の曲がりや脚の開き、第 2 空中局面で伸身姿勢が一直線でない、姿勢欠点(膝・つま先が伸びない、脚の開き等)伸身姿勢が保てない、また、着地姿勢が乱れたり着地をした際の頭の位置が腰より下がったりする実施が見受けられました。

また、高い D スコア 5.40 のロンダート後転とび～後方伸身宙返り 2 回ひねり、5.60 の伸身ツカハラとび 2 回ひねりを実施した選手は、姿勢欠点や着地姿勢の減点はあったものの、第 2 空中局面で着手からの高さやスピードがあり、ダイナミックな実施が見られました。

高さやスピードのある着地の先取りができた実施があり、着地姿勢が高く素晴らしい跳躍もあり、E スコア 9.00 以上の選手は 84 名中 18 名(21%)でした。

今後はさらに、スピードとパワー・完璧な技術と安定性・技の大きさと滞空時間を追求して行ってほしいです。第 1 空中局面において正確な入り方を実施すれば支持局面での確実な突き手と鉛直面での身体の通過が可能となり、第 2 空中局面における高さや距離を伴う正確な着地に繋がっていきます。日々練習を積み、さらに多くの選手がより高い D スコアの獲得と E スコア(できばえ)雄大性、美しさ、着地を止める完成度の高い跳躍に挑戦して行ってほしいと願います。

C 2 段違い平行棒

D 1 審判員 高橋洋子

1. 採点上打ち合わせた事項

(1) 採点指針の確認(情報 30 号)

「腕の曲がりや膝、つま先の緩みのない美しく伸びた体線での正確な技の実施」を最重視し、特にけ上がり、振り上げ倒立、車輪などの基本技において膝やつま先の緩みが見られる実施や、身体の姿勢が悪い実施に対しては、第 8 章「一般欠点と減点表」、第 11

章 段違い平行棒「種目特有な実施減点」の減点項目に則り減点をし、体線の美しい演技とそうでない演技をEスコアにて明確に差をつけることを確認した。

さらに、技の特性を理解したうえで各技の理想像を持ち、「振幅が大きいダイナミックな演技」、「多様な空中局面を伴う技を組み入れ、組み合わせ点を獲得できる演技構成」を評価することを確認した。

(2) 短い演技についての確認

「短い演技」とD審判団が判断した場合は、技の実施数によりEスコアの最高点が変わるため、その都度承認した技数をE審判団へ口頭にて伝えることを確認した。

(3) アシスタント任務の確認

計時の任務内容（予選・決勝の練習時間の計り方、中断時間の計り方）を確認した。また、選手が落下による中断時間の計測を開始することを避けるために故意に足から立ち上がらない場合の対応、中断時間中に止血が必要であると判断された場合の対応についても確認をした。さらに、コーチから計時の減点の再確認の要求があった際に速やかに対応できるよう、過失はすべて記録しておくことを確認した。

2. 採点上起こった事項とその処理

終末技の実施中にコーチによる補助行為（演技を助ける）があったため、規則に則り終末技の難度点なし、最終スコアから1.00の減点をした。

3. その他特記事項・意見・感想等

今大会、予選で実施された全266演技のうち、8.00以上のEスコアを獲得できたのは21演技で全体の約8%、7.5以上8.00未満が24演技で約9%、7.00以上7.5未満が36演技で約13%、7.00未満が185演技で約70%であり、全体的に身体の姿勢の美しさに欠ける演技、技を実施する際に膝やつま先まで意識が行き届いていない演技、完成度の低い演技が非常に多く見受けられました。特に、け上がりで脚をもってくる際に膝が緩む、振り上げ倒立で脚を後方に振り上げる際に膝が緩む、つま先が伸びない、肘が曲がる、身体の反りが見られる、振り上げ倒立が倒立局面まで到達しない、車輪で低棒を通過する際に膝、つま先が緩む等、段違い平行棒の基本技であるけ上がり、振り上げ倒立、車輪における姿勢欠点が非常に多くみられました。選手のみなさんは、構成要求を満たすために技を入れること、Dスコアを上げるためにより難しい技や組み合わせに挑戦すること、長い時間をかけて習得した技を演技の中に入れ、その演技を競技会で成功させることを1つの目標に日々のトレーニングに励んでいることと思います。しかし、Dスコアの向上だけを目指しても実施減点が伴えばトータルのスコアは上がっていきません。膝、つま先の緩みや身体の姿勢の欠点は技を実施するごとに減点されますので、姿勢欠点があるまま難しい技を実施しても、技数が増えていくとさらに減点が増えてしまいます。体操競技ではより高いDスコアを目指して技の難度を上げていくことはもちろん必要ではありますが、それと同様に、またはそれ以上に、いかに欠点なく美しい姿勢で実施できるかということがとても重要です。地面から足が離れたらつま先を伸ばすこと、演技中、常に膝やつま先まで意識が行き届いていること、常に美しい姿勢であること、これは体操競技の基本です。選手、指導者のみなさんには一つ一つの技をどれだけ美しく正確に実施できるかということにも意識を向

け、日々のトレーニングに励んでいただきたいと思います。どの瞬間においても膝、つま先の緩みのない、美しい体線での演技が多く実施されることを切に願っております。

C 2 平均台

D1 審判員 山口千重美

1, 採点上打ち合わせた事項 (情報 30号)

採点指針の確認

(1) 採点指針を元に、立ち姿勢を含め、膝、つま先まで意識された美しい姿勢での演技を重視し、その美しい演技ができた上でDスコアの高い演技を評価することを確認した。ダンス系の技の姿勢欠点のある実施や正確さに欠ける実施には、「身体の姿勢の減点」「高さ」「正確さ」の減点項目に則り、厳密に減点をすること、演技全体を通してつま先が伸びない、つま先立ちでの動きや運動に欠ける演技に対しては、「演技全体を通して身体の姿勢が悪い大きさ不十分」の減点項目を使い減点をすること。指針に沿った演技とそうでない演技の差を明確につけることを確認した。

(2) 短い演技についての確認

「短い演技」と判断した場合、その都度E審判団へ口頭で伝えることを確認した。

(3) アシスタント任務の確認

練習時間、演技時間、中断時間の計り方を確認し、質問に備えてすべて記録しておくことを確認した。

2, 採点上起こった事項とその処理

(1) 競技直前の練習中、爪が割れて出血。「平均台に少し血がついてしまった」と監督から報告を受けたので、選手のケガの確認を行い、運営で準備していただいたキットで器具の消毒を行ってから競技に入った。

(2) 予選において、Dスコアの確認が3件あったが、承認要求を満たせていなかったため、承認できない旨を口頭にて監督に説明した。

3, その他特記事項・意見・感想等

今大会では、アクロバット系の技、ダンス系の技ともに、選手が行った技が不正確な実施であったため、承認要求が満たされずに「異なる技」「難度なし」と承認したものが多々ありました。予選決勝ともにD難度以上のダンス系の技、組み合わせ点、シリーズボーナスに取り組んでいる選手が多く、高いDスコアの獲得を目指した演技構成にチャレンジしてきていることが伺えました。ただ、「異なる技」となった場合に、構成要求が獲得できなくなった選手もいたので、技を実施する順番や演技構成を再度確認した上で試合に臨んでほしいと思います。今大会の決勝では、最も高いDスコアは「6.3」、他4名の選手が「6.0以上」、26名の選手が「5.5~5.9」のDスコアを獲得しており、組み合わせ点まで意識をした練習に取り組み、試合で発揮できる強さに頼もしさを感じました。引き続き高いDスコアの獲得を目指して頑張ってもらいたいです。

その一方で、採点指針にもある「立ち姿勢、つま先まで意識された常に美しい姿勢での演技」「技の前の「調整」のない流れのある演技」ができていない選手が少ないことが気になりました。平均台は立ち姿勢、歩く動作、座の動きと言ったように、繋ぎの動作が多い種目なので「技⇄技」「技⇄動き」という部分も意識して取り組んでいただきたいと思います。ダンス系の技においても開脚

不足や膝つま先が伸びていないものが多く、その技の完成形にたどり着くまでの過程も含めて「身体の姿勢の減点」「高さ」「正確さ」の減点が1つの技ずつ対象になるので、正確で熟練された技の完成を目指してもらいたいです。

演技全体としては1歩足を出す際の膝やつま先まで常に意識された美しい演技だったか、つま先立ちでの動きや運動に欠けていなかったかといった部分から、指針に沿った演技とそうでない演技の差がEスコアとして明確に表れたように思います。技だけでなく美しい姿勢等のすべてを含めたものを演技と捉え、今後の練習に励んでほしいと思います。

C 2 (ゆか)

D 1 審判員 木村幸代

1. 採点上打ち合わせた事項

情報30号の「ゆか」採点指針を読み直し、指針に沿った演技を評価することを確認した。指針に沿わない演技には、規則集第8章の「一般欠点と減点表」、第13章の「芸術性と構成の減点」「音楽性」「種目特有な実施減点」、そして変更規則Iにある「前向きでない構成」の減点項目に則り、採点を行うことを確認した。

また、アシスタント(線審・計時審)の任務内容を確認し、コーチからの減点の再確認に対応できるよう、過失はすべて記録しておくことをお願いした。そして、予選・決勝とで、練習時間が異なるため、それぞれの練習時間について、計時審と確認を行った。

2. 採点上起こった事項とその処理

特になし

3. その他特記事項・意見・感想等

2024年パリオリンピックを目指す選手にとってはもちろん、すべての選手にとって情報30号は重要なものだと思います。そこに記載されている採点指針で最重要項目とされるのが「美しい姿勢」です。

ゆかに関しては、アクロバット系の技での膝・つま先は意識されることが多いものの、ダンス系の技や振り付けなどの動きにおいては見逃されていることが多いと感じます。難度獲得にばかり意識がいき、膝・つま先といった採点指針の最重要項目に欠かせないことが疎かになっている選手が多くいたように思います。

例えば、ダンス系の技では「ターンの浮脚」「輪とびの後ろの足」「ウルフとびの曲げた脚」「伸身とび」などでの「つま先」。振り付けなどの動きでは「座・伏臥姿勢になったとき」「コーナーでポーズをとったとき」「1歩2歩歩いた・走ったとき」の「つま先」。ジャンプ・ターンでの「上体の姿勢」「腕の位置」も見逃されていると感じます。

「美しい姿勢」は、短い時間で習得できるものではなく、技によっては慣れた方法を変え一から見直すなど、時間を要するものと思います。諦めず、そして選手自身が美しい姿勢を大事にする意識を大切にしたいと願います。

芸術性については多くの選手が意識していたと思いますが、審判員にばかり笑顔を向けたら、目力をアピールすることが気になりました。表現は表情だけでなく、身体全体を使って表すものです。規則集や採点指針にもあるように、見ているすべての人を魅了する演技を目指して欲しいと思います。そのためには、曲選びも重要視して欲しいと思います。曲調とあっていない表情での演技、バックグラウンドミュージック（演技の開始と終了だけ音楽に関係している）のような演技にならないよう、選手の個性を最大限引き出し、曲が鳴っただけでも観衆の視線を引き付ける曲選び、そしてその曲に合った振り付けをすべての選手に期待したいと思います。